

中国で広がる連携と調和を意識した都市発展戦略の転換

葉 華

連携・調和の重視

2006年3月に発表された中国の第11次5カ年計画には、国レベルの発展戦略の方針転換が示されている。そこには、①環境・省エネの重視、②格差を是正する調和の重視、③都市および地域連携の重視——の3つのポイントがある。

都市や地域が独自に発展を追求するという従来の考えを見直し、各都市間、各地域間および都市と地域間での共存共栄の発展を目指そうという姿勢がうかがえる。いわば「個人プレー」型の成長戦略から「ネットワーク」型の成長戦略への転換である。

「個人プレー」型成長の歪み

この背景には、環境問題が深刻化し、貧富の格差も無視できないほど拡大していることがある。

中国の単位GDP（国内総生産）当たりのエネルギー消費量は、日本の約9倍にのぼり、省エネ対策は中国のどの都市や地域でも喫緊の課題である。

また、1人当たりのGDPは省別で見ると10倍以上の開きが存在する。たとえば、北京市はすぐ隣に貧困村が多数存在し、上海市でも、面積で全体の10分の1程度の中心エリアと、ほかのエリアとのレベル差が大きい。

そうってしまったのは、都市や地域が自身の競争力を高めることに策をめぐらす一方で、周辺都市や地域との役割分担を通じた総合的な発展の追及という、中心都市が本来持つべき役割を十分に果たしてこなかったからである。

「ネットワーク」型成長の力点

省エネ社会、調和社会、連携社会は、いずれも個を超えたネットワークに基づく視点と、戦略への転換が不可避になっている。

その典型的な例は、人口1000万人を超えるメガ都市の都市整備の考え方の変化に現れており、特に以下の3点について顕著である。

第1に、計画の範囲が拡大されたことである。従来の都市計画は

都市の行政区域のみが対象だったが、それに加えて都市の行政エリアを超える広域計画（空間、産業、交通の各計画など）のあり方が模索されている。「長江デルタ区域計画（上海市および江蘇省、浙江省の16都市を中心とする）」や、「京津冀都市圏区域計画（北京市、天津市、河北省を中心とする）」がその例である。

第2に、都市構造の変革を念頭に置いていることである。都市中心部の機能をより高度化させていくとともに、周辺に都市機能の拠点をつくり広域連携に備えようとしている。上海、北京、天津、重慶、広州などの中心都市はマスタープランを改正し、新計画には、都心機能の拡大、副都心機能の強化、および近郊業務核都市の整備といった内容を盛り込んでいる。

第3に、都市での大規模広域型の交通・物流施設の整備が活発化していることである。外向型の交通ネットワーク、空港・港といったゲートウェイ施設、および都市

間鉄道の整備が都市インフラ整備の主演として登場しつつある。

NRIが協力する都市発展戦略

野村総合研究所（NRI）では、中国の首都である北京市、中国の直轄市（省と同格の行政区画）である天津市、上海市および重慶市において、都市発展の長期戦略プロジェクトに携わっている。

これらのプロジェクトは対象やタイプは異なるが、いずれも「個人プレー」型の成長戦略から「ネットワーク」型の成長戦略への転換を試みようというものである。

北京市と天津市の発展は一体化

2005年に北京市と天津市のマスタープランがそれぞれ改正された。

2つの直轄市のマスタープランの共通点は、都市ビジョンと都市構造の変革であり、中心市街地の外側における、都市間連携のための広域機能を持つ業務新都市の形成がキーメッセージとなっている。両都市は、「内側発展重視」から「外側発展重視」の連携時代に入る傾向がうかがえる。

北京市と天津市のこのような構造転換を束ねているのは、前述の京津冀都市圏区域計画である。本計画の最も重要なポイントの一つに、北京、廊坊、天津の各市に構

成される「京津発展軸」の一体的機能の形成がある。現在、京津発展軸地区は京津冀区域全体の約16%の面積、約32%の人口集積と、GDPベースで約54%の経済規模を有し、同区域の「背骨」である。

首都機能を持つ北京市と広域経済中心機能を持つ天津市が、機能役割分担のもとで京津冀区域の背骨を支える「ツインコア（双核）」構造を形成することが、同地域の長期的な発展目標として期待されている。

「脱重慶」と「脱上海」

重慶市は人口3000万人超の世界最大の都市で、本来、西部大開発の中心となるべき都市であるにもかかわらず、いまだに周辺地域を牽引するだけの力はないのが実状である。今後、いかに自身を国際的ネットワークの中に組み入れ、周辺地域と連携しながら重慶ならではの強みを発揮し、広域における牽引力を発揮していくかが課題となっている。

NRIは、交通物流ハブというコンセプトを具現化するための条件に焦点を当て、広域産業連携と広域交流連携を軸とした都市発展戦略、将来における国内外の「ネットワーク」型発展を可能とする都市整備のあり方、および総合力を

駆使した周辺地域に対するサービスについて提案し、西部および西南地域のための「脱重慶」発展戦略を提唱している。

一方、長江デルタ地域に位置する上海市のプロジェクトでは、「メガ総合交通ハブ地域の発展戦略」がテーマとなっている。

計画では、2010年までに空港、北京—上海間新幹線、上海—杭州間のリニアモーターカー（現在採算可能性を調査検討中）、さらに複数の都市鉄道のターミナルがシームレスに集結し、世界に類のない一大広域交通ハブが実現されることになっている。

NRIは、このような「メガハブ」を活かして長江デルタ地域の広域的な統合機能を育成し、これまでの独走的発展を超えていかに周辺地域を巻き込む成長戦略を構築するかを検討し、長江デルタ地域全体のさらなる成長を支える「脱上海」発展戦略を提案している。

以上のプロジェクトは、ともに中心都市の周辺地域に対する連携や統合が主要テーマになっており、中国で広がる連携と調和を意識した都市発展戦略への転換を象徴するものといえよう。

.....
葉華（イエ・ファ）
NRI上海副総経理